
右手は過去に干渉する聖剣を左手に未来を紡ぐ魔銃を

鈴本 謙一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

右手は過去に干渉する聖剣を左手に未来を紡ぐ魔銃を

【Nコード】

N9556Z

【作者名】

鈴木 謙一

【あらすじ】

特別な瞳を持つ天野翔は神奈川トップクラスの魔法専門学院 星風学院高等部に入学した時、止まっていた彼の能力が目覚める。

世界で一人のキミに（前書き）

初めまして打ち間違えとあつたらスイマセン

世界で一人のキミに

気づいたら変な場所にいた。

黒い？ 暗い？

簡単な印象はこうだ。

どこまで見渡しても黒い景色しか見えない。誰しもこの空間の中にいたらそう思うだろう。

上を見上げれば月があるが、何て言うか寂しいねえと思う。それも真っ赤な月が輝いて見える。

「はあ」

ここにいと妖怪とか悪霊に遭遇しそうだしね。にしても暗いなあ。

全てが真っ黒に染まっている。月の光さえも届かない世界になっている。

漆黒の空間と言ってしまった方が良いのかもしれない。この漆黒の世界は何のために存在しているのだろうと考えるが分かる訳もない。しかも、ここはとんでもなく冷たいと思う。肉体的というより精神的な意味で。

本当にこの世界は一体何だろう。なぜ、俺はこの世界にいるのだろう。

確か俺は夜、なかなか寝付けなかったので本を読んでいたのだが気がつくところだった。

あまのかける

天野翔 何処にもいそうな平凡な高校生。背丈は少し高校生

にとつては高い方の分類に入る。中肉中背で印象に残らない顔つきで、黒い髪に黒い瞳の少年だが、この少年には一つ、普通の高校生には持つてはいない物を持っていた。

それは瞳の中に鈍く光る金の六芒星と銀の五芒星の形をした紋様もんようが薄っすら描かれている。

辺りを見渡したが何も見えないし何も聞こえない。しかも眼もな

れることが無い。

「変な空間だなあ」

何処となく呟く。

…っ…

不意に何かが聞こえてくる。

…は…っ…

途切れ、途切れに聞こえてくる。

今にも消えそうな声が何処からか聞こえてくる。

なぜ？

頭の中から疑問がどんどん膨らんでくる。

こつも暗いと要らない想像をしてしまう。 というか想像するなと

言う方が無理だ。

夢なのかも分からないのに。

でも、人間はよくできた動物だ。

要らない想像すればするほど、どんどん現実にいるのではないかと脳が判断する。 こんな状況になったら人間はもう駄目だ。 恐怖に負けてしまう。

つくづく、面白い動物だと俺は思う。

「だから、リアルは嫌いなんだよな」

俺はリアルが嫌いだ。 すべてが神によって定まった法則に添って行動するこの世界が嫌いだった。 仕組まれているようで嫌だった。 愚痴っても仕方がないので俺はもう一度、現実を見ることにしようとした。

……………

やはり聞こえてくる。

しかも、さっきよりも大きく聞こえてくる。

何だか呼ばれているみたいだ。 本当なら行くべきなのだろうが足が動いてくれない。 どうやら恐怖で動けないらしい。

「……………」

自分でも情けないと思う。

声が聞こえるのに恐怖で足が動けないなんて男としてどうよ。

「はあ」

いつの間にか溜め息をついていた。

少し気分が落ち着くまでそれを繰り返し。

「行くかあ」

勇気を振り絞って足を動かす。一步、一步、足を踏み出す。黒い世界に引きずられるように進む。右手の鎖が月の光によって鈍く輝いた。右手の手の平の内側、二本と手の甲の外側、二本の鎖が腕輪につながれている。このチャラチャラとした音だけがこの世界に響くゆづいづの音になる。

この黒い世界ではこの音だけが理性を保つことができると思って、翔自身は臆病な性格ではなかった。

この世界にはどうやら自分意外を探すにはこの声の方向に行かなくてはならない。少し、歩くと泉らしきものに足を踏み入れたらしい。何故かと聞かれると、足元からピチャ、ピチャと音が聞こえてくる。

ゴン！

派手な音を鳴らしながら膝を付き、ぶつけた場所をさする。翔は眼があまり見えていなかったので何かにぶつかったようだ。壁だと思いが目が慣れていないのでよくわからないでいた。

「はあ？」

だが、突然に目の前に大きな壁が見えた。

眼はまだ見えていないはずなのに、どうして見えるかは分らないが壁は柱のような形をしていた。

つか、どういう原理よ？

どうやらこの柱は泉の上に立っているらしい。多分というか見たまんまだが。柱の周りを回ってみるか、横切ってみるかを考えていたら。

また何処からか声が聞こえた。どうやら近いようだが何処かはわからないでいた。

少しイラつく。自分の事を試しているみたいでイラつく。

翔はこういう事は嫌いだった。

なぜ、神は平等に何もかも与えなかったのだろう。どうしてここまで歪んでいるのだろう。

翔は少し変な妄想をして改めて今の状況の事を考えていたが……
「つう！」

不意に激しい頭痛に襲われ片足が地面につく、意識が飛ぶほどの強烈な頭痛。

……
声がまた聞こえたが翔は痛みを堪えるだけで必死だった。

しかも勝手に自分の口が動き出して声^{つむ}を紡ぐ。

……暗い……

ここは暗い。とても暗い。

すべてが真っ黒に染まった。目に映るあらゆるものが黒い。

口が勝手に動き更にまで勝手に声まで出てくる。

……この世界は……ここは何処だあ……

……どうして……

何で勝手にしゃべるんだよ。これは俺の肉体じゃないのかよ。

翔は肉体を動かそうとしてもピクリトも動かない。口を閉じようとしても閉じてはくれない。

それに……

ここにいと悲しくなる。

なぜなんだ？

こっちが聞きたい。お前は誰だ。人の体で勝手にしゃべんな！

……

……き……い……

……えっ……

何かが聞こえる。

こっちの話をまず聞け。

……づ……て……

何を言っている？ もう少しよく聞こえるように話してくれ。
だから、人の話を聞け！ お前は誰なんだよ。

……い……

何を言っているか分からねえ。

こっちの方が分からねえよ。ああもう何でかみ合わないんだよ。

……わ……き……ほ……め……

どんどん声が大きくなっている？ 意味が分からねえ。

だから、こっちの話を聞けよ。しかもいつの間にか喋り方が砕けてきてるぞ。

……

向こうに何かがある。そんなような気がする。だけど、進めない。
暗過ぎて怖い。

あのーそろそろ無視するのはやめて下さい。

片膝を付いていた翔はむくりと立ち上がり一歩、一歩と声が聞こえる方へと進んでいく。

コラ！ 勝手に人の体を動かすなよ。

……

また、苦しむ声だ。

痛みを堪えながら更に一歩、一歩前に進んでいく。

……て、俺の体を……勝手に使っ……っ……な……

唐突に翔の意識が落ちた。

……

声はドンドン酷くなっている。とても、苦しんでいる。

何か分からないが自分だけではなくもう一人、この暗い世界にいる
と思う。急いで進む。

……

声が途切れそうになる。

……

危機感を感じたのかももう歩いてはなく、走っている。それも相当

必死に。この暗い世界から聞こえる声を頼りに走る。

『私の声を聞いてほしい。そして目覚めて早く』

今度は確かに聞こえた。

誰かの声が聞こえた。

囁くように聞こえた。

女の子の声が聞こえた。

ここに女の子がいるのか？

分らない。

分らない。

どうしても分らない。

なぜ、女の子の泣き声が聞こえるのか。

ここはどこなのか。

意識が段々朦朧^{もろろ}としてきた。

走るのが段々辛くなってきた。

足が自然と止まる。

少しずつ辺りがボヤケテクル。

ココハドコ？

キミハダレ？

ドウシテナイテイルノ？

オレニナニヲシテホシイノ？

メザメルツテダレガ？

ミギテガアツイ。

ミギテガモエルヨウニアツイ。

ヤカレテルミタイダ。

イヤ、ヤカレテイルノカナ。

モウドウデモイイヤ。

メヲツブロウ。

ラクニナロウ。

サヨウナラ。

その場に倒れた。

少年の心が暗闇の中に封じ込まれた。

赤い月が夜空に浮いている。雲が一つもない世界でこの世界を照らしている。下には黒い泉があった。この泉は何処までも続いていた。まるで、大きな海だ。

その海のおちこつちに、柱が浮かんでいる。

崩れている物があれば新品の物もあるし風化した物もある。大きなさや寸法までもがバラバラ。

そんな場所に一人の女の子がいた。

この子はこの中で一番大きな柱に座っている。腰まで届く黒い艶のある髪に和風の服装に顔立ちはやや幼く、綺麗な卵型の小さな頭に、だが瞳からなぜか涙がこぼれている。瞳は金の六芒星が綺麗に描かれている。

「…………私の事を絶対に忘れないって言っていたのに…………どうして声が届かないの……………」

彼女は涙声で彼に訴えている。

目の前で倒れている少年に。

彼女は立ち上がり少年のところに歩み寄り。

「早く目覚めて、私の事を思い出して、私の名を早く呼んで」

彼女は一生懸命に訴えた。

届くかは分からないがそれでも続けた。この世界で彼女の事を認識ができるのは恐らく彼だけだ。

そしてこの世界中で彼の事を誰よりも知っているのは彼女だ。

彼女は祈るように目を閉じて彼の事を思う。この暗い世界を照らしてくれる少年の事を思い続ける。この少年にしかできない事を。自分を認めてくれる確かな存在を。長い孤独の時間で、初めて自分を認識してくれた存在を。

初めて自分の声を聞いてくれた人。

初めて自分を認識してくれた人。

初めてできた友達。

初めて必要と言ってくれた人。

「だから、早く目覚めてお願いだから早く。そして、思い出して私の事を」

少女が眼を開けた時には少年の姿は何処にもいなかった。煙のようになくなっていった。幻だったのかと思うほど何も残っていない。

「早く、私を迎えに来て」

少女は月にむかつて語りかける。

少女は夢を見るような顔つきになりいつの間にか瞳からは涙が枯れ果てていた。

世界で一人のキミに（後書き）

どうも、始めて作品を作り、勇気を出して投稿しました。いたらないところもありますが楽しく読んでください。

1 入学（前書き）

ウーンこれで良いのかなと悩みながら投稿しましたうち間違えがあったらすいません

1 入学

春。

それは出会いの季節だったり、別れの季節だったり、恋の季節だったりする。

陽気な気分にしてくれる桃色の桜、新入社員や新入生を歓迎していると勘違いしてしまう美しさ。

暖かくもなく寒くもない心地よい気候。

人々が自然に頬が緩む季節。

「まあ俺にとっちゃあどうでもいいけどな」

晴天に包まれた空を見上げながら翔はそう呟いた。

翔は今、せいなき星屈学院高等部の入学式が始まるまでの間、講堂の外でぼーとしていた。

始まるまで中で待っていてもいいのだが生憎、翔はそういう気分になれなかった。

「……寒くないの？」

唐突に後ろから声をかけられる。振り向くと下ろし立ての制服に身を包んだ幼馴染がいた。

オレンジ色のブレザーに少し赤みがかかったスカート。この組み合わせは彼女の黄色の髪に似合っていないと翔は思う。

だが、彼女自身はあまり気にしていない。気にしていないものを翔自身気にしても仕方がないと思うので口には出さない。

周りを見れば彼女に視線を向けている男子がチラホラという。

（普通に考えればコイツは可愛い分類に入るのは分かってるが何か釈然としない）

女子の分類だと少し身長が高い。スタイルは外人の母親似で出るところは出てる。

「翔は、またサボるための口実を考えていたの？」

次に声をかけてきたのはかなりの美男子だった。

彼の周りにはキラキラと輝く星が見えるくらいの整った顔、この年の人に比べたら高い身長、更には頭が良く、運動神経も抜群に良い。完璧と言言葉は彼の為にあるのではないのかと錯覚してしまう位に全てが整っていた。

二人の名は千堂燐せんどうりんと真田努まなだつとむ

「サボるわけないだろう。なんたつてお前達が主席で入学して、その代表までするんだぜ？ 幼馴染としては見なきゃ損だろう？」

そう彼ら二人は主席入学した為に新入生代表を務める事になっている。

当初はそれを聞いたときは自分の事みたいに喜んだもんだ。いや、違った。自慢だった。二人は小学校も中学校もいつも優秀でかけがえのない友達だと思う。俺には少しもつたいないが……

「ホントにそう思ってる？」

燐は少し、顔が赤みがかかった表情で問う。

「翔がここまで言うならそうなのだろう。燐は気にしすぎ」

努は笑いを抑えながら翔のかわりに答える。

（ホントにできすぎーですよ努君）

心の中でそうツツコミを入れる。

「そういえば翔の両親はやっぱ来ないのかい？」

努は何気ない言葉で語りかける。隣では燐が罰悪そうな顔で努を肘で突つつく。

燐の行動よりも翔はむしろ努の態度の方が有難かった。この態度に何度も救われたことやら。

「来てるわけないだろう。妹の入学式に言ってるよ」

俺には双子の妹がいる。俺に比べたら優秀過ぎる妹が……昔からその妹と比べられていた俺は何度も妹を殺そうかと本気で考えていた時期もあった。そこまで恨んでいた。だが、この友人たちはそんなことを無視して俺を慕ってくれる数少ない友人だった。

（だから、俺は腐らなかつたんだろうな）

しみじみに思う。自分にこの友人達がいなかったらどうなってい

ただろうかと。

「でも、息子の大事なイベントに親が参加しないってどうかと思う」「
燐は寂しそうな声で呟いた。

翔達は少し罰の悪い顔で見つめ合った。

「そろそろ時間だ」

努は腕時計を見てそう呟く。

「そうだな。初めっから遅刻は良くないかー」

冗談で言ったのに二人とも翔を軽く睨んでいる。

「……おい?! なんだその顔は」

このやり取りでさつきまであった微妙な空気が霧散した。

翔達が通うことになる星風学院は横浜でも特にレベルの高い学校である。この学校は本来は中高一貫の学院なのであるが翔達は高校からのいわゆる編入組だ。

「俺は、よくこの学校に受かったよな」

まだ、入学式が始まるまでもう少し時間があるので、努達は先に行かせて翔は講堂の外にいた。

（つか、この学校広くないっすか?）

辺りを見渡しながら心に中で呟く。

この学院は普通の高校に比べて五倍はある。大げさにいえば大規模な大学に見える。それほどの敷地がある。しかも高等部だけで、中等部は別の場所にある。

「つと、もうすぐ始まるな」

翔は時間を確認して講堂の中に入る。

今年度の新入生は全員で百五十人いる。ひとクラス四十人のエリートクラスが四つ、後は落ちこぼれ三十人集まったクラスに分かれ

る仕組みだ。なぜ、高校入学した瞬間に優等生と劣等生に分かれるかというところの学院は神奈川にある魔法を学ぶ高校の中では一番の学校であるから。

魔法

おとぎ話とかゲームやアニメに出てくる単語だが、今や現在にちやんとある当たり前の力。

人間自身の生命エネルギーと精神エネルギーを合わせたマナという力を吸う魔道具でこの世界に炎や水といった力を具現化する。
マジックアイテム

この技術がこの世界に浸透したのは今から千年前、二十二世紀に突入した辺りから世界中にオーパーツ（この世のに存在しない未知な物）と呼ばれる石が数々発見された。当時の学者達はこの石がなんなのかを解明できずにいて、闇に葬りかけたが一人の天才によって謎は解明された。

それは、この石が人間の生命エネルギーと精神エネルギーが合わさったマナというエナジーを触媒にして不思議な現象を生み出す事ができると分かった。

この事実は世界にも伝えられ当時は大騒ぎだったらしい。それもそのはずだろう科学が発達した世界に魔法などありえないと考えていたからである。当時から超能力者などがいたがそれは科学的に解明できていたからであって、石一つで世界の事象に干渉するなど普通に考えて無理だからである。

だが、天才学者はこの力を更に分析していった。この石は人間の中にある性質を読み取り風、火、土、水、無という属性を発生させる事も分かったので、学者達は石を加工して色々な形に作り替えて世界中から選ばれた10人に持たせて実験を開始した。これが歴史上初の始祖魔術師達だ。

更には実験により属性を一つだけだったり、人によっては多種の属性が扱えたりと色々なパターンがあることが分かり、更に光、闇、

雷、氷、木の五つも確認された。学者達は色々な実験を経て、遂に三百年前に世界が認めて、魔術の法律ができた。

魔術は国の繁栄と平和にこの力を世界的使うことを認められた。

講堂の中に並べてある椅子の順にクラス分けがされている。右の真ん中から魔導士まどうしのクラス、左の真ん中が魔術師まじゅつしのクラス、右端が魔法遣い（まほうつかい）、左端が魔法士まほうしと順に並べられてる。

もう一度言うがひとクラス四十人だから残りの三十人はどこのクラスかというが一番後ろの席、いわゆる落ちこぼれクラス。

翔もその席に座り、周りを見渡せばこれからの事で胸を高鳴らせている者や緊張と困惑が入り交じった者もいる。だが、翔の座った席の者だけは違った。俯いて誰とも顔を合わせる者がいない。

前後でここまでの温度差がでる。彼らのクラスを魔法使まほうしと言っ

（わかつちやいたがここまでとはな）

翔は溜め息を飲み込みひたすらこの時間が過ぎることを祈る。

『新入生の皆さん、席についてください』

考え事をしていたら入学式が始まるうとしていた。

翔は声がする方へと向く。声の主は無表情の女の人だった。

背が高く、整った顔に長い黒髪、切れ長の瞳。圧倒的な美人の先輩

輩の声が講堂内に響く。

『繰り返し言います。新入生の皆さんは、直ちに席に着席してください。繰り返し言います。新入生の皆さんは、直ちに席に着席してください。』

新入生は次々と席に着席していく。

（さて、退屈な学校生活の始まりだ）

翔は嘆くように呟く。

数時間後。

無事に入學式が終わり、五つのクラスは自分達の教室に向かう。

この学校は無駄に敷地面積が大きいのでクラスによっては校舎が違ふ。翔達、魔法使のクラスはこの学校の中では一番奥の校舎である。

引率の先生の後を追う。

今日から三年間を学ぶ校舎だ。校舎には流石に差別はなかったが下を向いたままの学生が多い。

（おいおい、大丈夫かコイツら）
半ば本気で心配する翔。

七階建てで一年生の教室は三階にある。階段を上り、広い廊下を歩き、教室に入る。

教卓はなく、黒板の代わりに大きなディスプレイが備えられている。そこには席順が書かれたデータが移されている。

翔は自分の席を確認して自分の席に着く。本来なら名前の順で廊下側の一番前なのだが魔法専門の学校は違ふ。実力順で席が決まっているので廊下側はこのクラスで魔法力が一番高い人が座る。

翔は窓側の一番後ろの席になった。普通ならいい席なのだがこの学校にとっては致命的な席。落ちこぼれなクラスの更に落ちこぼれの烙印を押される。

自分の席に座り、仮想ディスプレイを起動させる。

そこに自分の学生番号と名前と魔術クラスを入力していく。更にはどの分野を勉強するかを自分で選ぶ。この学校は単位制なので卒業に必要な単位は自己の判断で習得する。やり方は大学みたいなシステムである。

案内をした先生はもういない。これからのことは自分で判断してやれっということだろう。周りの生徒も席について翔と同じ事をし

ていた。教科の説明を飛ばして、翔は教科を選ぶ欄の前で少し悩む。
（まあー他のクラスとは一緒にやらないから適当に決めて、楽に稼
ごうかな）

翔は楽に稼げる教科を選択して、決定のボタンを押そうかと思っ
た矢先に隣から声がかかる。

「もう決めちゃったの？」

隣に視線を向けた途端、翔は絶句した。

モデル顔負けのスタイルに整い過ぎた顔、更に女としての曲線が
制服で隠しきれしていない。更に驚くべき点は豊かな胸だった。

「……………どうしたの？」

再度、声がかかるまで翔は思考が停止していた。

「…あ……………ああ、すまない……………」

「別にいいけど」

どうやら彼女は男子のいや、男の子特有の態度には慣れているよ
うだ。

（このルックスだと異性の眼が行くわな）

さっきまでは凝視していたが翔の中ではもうどうでも良くなって
いた。

「話は戻るけどそんなに簡単に教科を決めて、大丈夫なの？」

「ああ」

今度は間を開けずに答えた。

「いいの？　ここはかなりのレベルの魔法専門の学院だよ。一年で
も五十の教科があるのに説明を見ないで選ぶのは良くないと思うよ」
「いいんだよ。どうせ俺は何もできない」
「えっ？」

隣の女の子は意味が分からないという顔をしていたが翔には関係
がなかった。今度こそ決定を押して、仮想ディスプレイを閉じる。

「……………」

まだ何かを言いたそうな顔であったが翔は無視する。

「どうしたんだい？」

女の子の前の席の男子が振り返り、話しかける。

（うわっー 何この爽やかな奴は？）

思わず心の中でツッコミを入れてしまった。いや、入れるしかないであろう。それほどまで笑顔が眩しい少年だって……つか俺も少年か……はあ……

背は俺と一緒にしろうがメガネをかけていて、優しそうな雰囲気を感じている。

「健司君、この人が説明を見ないで教科をばっつと決めたのを注意してたの」

女の子は少しむくれた顔つきで健司と呼ばれた少年に言った。

「それは良くないよ。……えーと……キミは……」

健司は翔の方に向き、言葉に詰まる。

理由は……物凄い酔いで睨んでいたからである。それはもう半端なく、しかも殺気つきで。

「どうしたんだ？」

微妙な空気を察して、翔の前の席の『男子？』が話しかけてくる。

翔は今度は前を向き、声がした方へと視線を向けた瞬間……固まる。

健司や翔よりも体格が良く、背も高い。元々癖が強いのか髪の毛がアッチコッチ跳ねている。

（怖ー何この無表情巨人ーん）

翔は心の中でそう呟いていた。

「スマン。怖がらせたか？」

『男子？』が不器用に笑いながら話しかける。

「おっと、スマン。失礼した」

今度は翔が謝り。

「お前は、俺達と同じ年なのか？」

と聞く。

「そつだ。見えないか？」

「ああ?!」

素直に答える。

隣からは二人の爆笑が聞こえてきた。

「面白いね。初対面でこんなこと聞いてくる人はいなかったよな。
恭輔きょうすけ」

「ああ、そうだな。ある意味新鮮だぞ」

恭輔は少し嬉しそうに呟く。

「そうだね。恭輔君の場合は知らない間に引かれているもね」

「それは酷いぞ。咲乃さくの」

健司が軽く非難する視線を咲乃に向けた。

「……そうね。ゴメンネ」

彼女は軽く真面目に謝罪をした。

「気にしていない。いつものことだ」

恭輔は寂しそうに笑う。

翔は今まで置いてきぼりだったが恭輔の態度に少し罪悪感を感じ
るがすぐに消えた。

「話は戻すけどどうしたんだ？」

恭輔は三人の顔を順番に見渡して答えを待つ。

二人が翔の方に向き、恭輔もそれにならう。いきなり三人から注
目されて……

（おい、何だよこの流れは）

翔は少し引きずった笑顔で。

「何もないよ」

と答えた。

「「……………」」

二人は無言でいた。

「そうか。あ、そういえばまだ名乗ってなかったな。俺は稲葉恭輔。
よろしくな」

恭輔は今更のように翔に自己紹介をする。

「ああ、俺は天野 翔よろしく」

翔と恭輔は互いに握手して笑い合う。

「そうだ。僕たちも名乗らないと」

「そうね」

隣の二人も今更のように気づき。

「僕は、佐久間健司だ」

「私は、荏原咲乃だよ。よろしくね」

「ああ、それと会話で気づいたんだが中等部からの知り合いなのか三人とも？」

「そうだよ。僕らは俗に言う幼馴染という関係だよ。それに魔導士のクラスにもう一人いるよ、今度紹介するね」

「ああ！」

翔は健司の説明を聞いた後に笑顔で二人と握手をする。

「そういえばさっきの続きんだけど天野君は、どうしてそんなに簡単に教科を決めてるの？」

咲乃は不思議そうに聞く。

最初に聞いてきたときは殺気を飛ばして黙らせたが恭輔の介入で霧散してしまった。だからか咲乃は再度、同じ質問をぶつけた。

「……はあー分かったよ、答える。俺はこの学校に魔法を学びにきたんじゃないんだよ。付き添いというか命令というかいろいろ事情があるんだよ」

「…………………」

三人ともわけが分からないと顔に書いている。それだけ翔が言ったことは魔法を学ぶものとしては異質の理由だった。いくらこのクラスが落ちこぼれでまとまってるからといって、この学院を出れば神奈川ではトップクラスの生徒に変わる。この星風はそれほど難しい学校であった。

「分かった、これ以上聞かない。良いな咲乃？」

「……うん……」

まだ納得していないのだろうが恭輔の言葉に咲乃はいちよう頷いた。

「ありがとう。稲葉君」

翔は本気で恭輔に感謝を込めた。

「その君付けはやめないか？　むずがゆいんだよ。俺も翔って呼ぶから恭輔と呼んでくれ」

「分かった。恭輔」

（努めたいな奴がこんなところにもいたとはな。神様に少し感謝）

翔は笑顔で頷いた。

「そういえばキミは、なんのクラスなの？　ちなみに僕は魔法遣いだよ」

健司はこの話は終わりと呟くように話題を変えた。

「……俺は魔法士だ」

翔は少し答えにくそうに言ったが幸いな事に三人は気付かなかった。

「なら俺と一緒にだな。武器はなんなんだ？」

恭輔の質問に更に答えずらそうにするが当の本人は気づいていない。流石に残りの二人は気づいていたが……その為に健司が恭輔を宥めようと口を開こうとした時、翔は腰に付けてるホルスターから一丁の黒い銃を抜いた。その光景に三人とも固まっていた。

「……うそ……」

咲乃が有り得ないものを見る眼で翔の持つ銃を見る。

（やっぱりか……）

翔は毎度お馴染みの反応にうんざりしていた。

「……すごいね。魔法士はどっちかというところと近距離戦が得意だろう」

健司はいち早く立ち直り恭輔に同意を求める視線を向けた。

「ああ、そうだ。……普通なら近距離だ……」

どうやら同じクラスの恭輔の方が信じられないようだ。

「よく言われるよ。だが、俺は運動神経がないから遠・中の方が気楽だから」

翔は半笑いで説明した。

「だけど、運動神経なら無属性の魔法で強化できるじゃないか」

（一般的な発想だな）と翔は思った。

「うーん、ならこう言えばいいかな？　俺は無属性というか無属性魔法が使えないんだよ」

健司達は何んとも言えない顔で翔を見つめる。

「あの……どういうことですか？」

咲乃は無意識に敬語まで使っている。

「属性魔法はひとそれぞれに流れる色のついたマナによって決まるのは分かってるよね？」

「……うん（おう）……」

魔法の基本属性である風、炎、水、土、無、光、闇、木、氷、雷には人には視覚できない色で体の中を流れている。魔道具はそんな色を的確に判断できる機能がある。翔は小さい頃にその検査をしたら基本の中の基本である無属性のマナがなかったのである。普通なら無属性が体にないだけで普通の生活ができないくらい重要な物である。当時を振り返って医師達は全員お手上げだっし親が奇妙な眼で見たことは幼い自分にはショックが大きかった。

「俺の場合は無属性の色である白が発見されなかった。そのせいで無属性の魔法が使えない」

翔の話が終わると三人とも何とも言えないか分からず困惑していた。

「別に無属性以外は使えるから」

曖昧な事を言いこの場の空気を霧散しようとしたが。

「でも……それは大変でしょう？」

咲乃の一言で霧散できなかった。

「うん、そうだね。無属性は魔法の基本だからね」

健司は済まなそうな顔で翔を見つめる。

「……済まない。少し、踏み込み過ぎた」

恭輔は深く頭を下げて謝罪する。その姿を見た二人も頭を下げ謝罪した。

「気にするな」

翔はその一言だけ言い、銃をしまい立ち上がった。

「教科を決めたら帰っていいんだろう？」

健司に確認をとる。

「う…うん……」

「そうか、明日からよろしくな！」

翔はそういうと教室から出ていった。

残りの生徒は少し間、翔が出ていった扉を凝視していたが自分のディスプレイに視線を戻して作業を再開した。健司達は少し間、気まずい空気を出していたが教科の内容を見ていたら勝手に霧散した。

1 入学（後書き）

入学編が終わり、学校の風景や日常をこれから一生懸命書いていきますね

2 仲間（前書き）

うち間違えがあったらすみません。楽しく読んでください。

2 仲間

翔は学院を出て、一人繁華街を歩く。

（俺は何をしたいのかな？ こんなものを着て（制服など着て）、街の中を歩くなんて）

制服姿の自分が情けないと思う。自分でも惨めだと思う。人に言われたからあの学院に入った？ ……違うだろう……あの家を出たいからあの条件を飲んだんだ。あの家は俺がいちゃいけない。兄や姉達に迷惑がかかる。それに使用人達が認めない。俺という存在を……そして何よりアイツが俺を許さない。

喧騒な町を無言で突き進む。すれ違う人々の顔すらも翔の目に止まらない。ある場所を目指して歩く。

いつの間に繁華街からオフェス街に入っていた。

（ここまで自分を侮辱してたのかよ。少し憂鬱だな）

段々人の気配が全くなくなっていったというか唐突に人が消えたと言った方がいいだろう。それに辺りが白い霧が出ている。それもそのはずだここはエリア魔法がかかった場所。悩める心を持たなければ入れない場所。

だが、残念な事に翔は別に悩んでいない。自分自身を陥れてるがこれはいつもの事であり気にしていない。

エリア魔法の中を進んでいくと大きな影が見え始める。そこを確認して、更に歩を進める。影の正体は大きな二つのビルだった。翔はそのビルとビルの間に一本の細い道があり、問答模様に突き進んで行く。細い道から唐突に獣道に変わり、歩きにくくなるが翔は気にしないで進む。

「空間魔法が少し古くなってるな。もう少ししたら修復するか。どうせまたウチに依頼するんだろっからな（…………）」

翔は辺りを見渡して呟く。瞳は銀の色に輝いていた。

獣道を超えて、古びた洋館に辿りつく。中世時代に作られた建物

は劣化が激しく、今にも崩れそう。シンプルな作りに窓はあつちこつち壊れている。古びた門は片方だけ壊れていた。翔は壊れた方の門を潜り、洋館の玄関へと向かう。壊れた噴水や荒れた花壇が広がった庭。夜にすれば立派な幽霊屋敷だ。玄関ドアの近くまで進むと翔は右手を真つ直ぐに伸ばした。それは傍から見たら何も無い空間に手を突き出す感じた。

玄関まで後、数歩の距離で翔の体が光輝いた。次の瞬間、翔はホテルのスイートルームの中にいた。

「これはこれは、翔君お早い到着で」

翔に声をかけてきたのは痩せていて今にも倒れそうな初老の爺さんであつた。

「駿策さん。この入り方どうにかならない？」

老人に軽く批判を込めた視線を投じるが彼自身は気にしていない。

「キミはこの嚴重なセキリティーに何が不満なんだい」

「不満よりは面倒ですね。毎回、訳の分からない道を歩かされるのは」

「ふむ、では聞こう。お主はどういうモノを構築するかね？」

老人は翔をわざと挑発していふうに言うが翔は溜め息を吐き。

「参考にされないのは分かっていますがね。はあー例えば空間拒絶の魔法は、客に限定に発動できるように改良してください。それに対敵用の魔法をあんな無残にかけると空間跳躍と喧嘩してしまい効果が半減になってますよ。それに空間に亀裂が生じてましたよ。あれは何重にもかけた代償でしょうが」

翔の指摘に何とも言えない顔で見ている。

「キミは本当に才能がないものと判断されたのかい？ 普通はそこまではないと思うけど」

老人はとんでもないモノを見る眼で見ている。

「そう思うなら少しは手を加えてください。元最強の幻術使いの名が泣きますよ」

「分かった、分かった、少しは改良しよう。それにまたキミ達に頼

むかも知れんがね」

老人は曖昧な事を呟いて翔は額を抑えていた。

「さて、ビジネスの話をするかね」

そう言うのと老人は部屋の奥に行ってしまった。翔はすることがないので携帯端末を取り出してメールの確認をする。

（やはり、文句の内容が三十件きてる）

翔は肩を落としてがっくりとしている。内容は全て翔に対しての文句。

（燐はどうしてこんなに文句が書けるんだよ）

「なんじゃ、彼女に怒られメールでもきたのか？」

老人はいつの間にか戻ってきていた。

「別にそういうわけじゃないですよ」

翔は肩を落とした状態で言うが説得力がまるでない。

「そうか。燐ちゃんと麻利亜ちゃんをあまり怒らせんほうがいいぞ」

何が面白いのか含みのある言い方をして椅子に座る老人。翔は今すぐ帰りたい気分だったが、ぐうつと堪えて椅子に腰かける。

「お前が言ってた物はこれとコレじゃあ」

大きなスーツケースと小さなスーツケースを机の上に並べた。

（ホントに齡九十の爺なのか？ よくこんなに重いものを持ってたな）

翔は半ばそんなことを考えたがスーツの中身を見たらそんなことは吹っ飛んだ。

大きな方は黒いプレートがあつた。

「これだけの材質を探すのに一苦労じゃよ」

老人は翔の反応に少しだけ喜んだ。

「まさか、本当に手に入るなんてな」

翔は興奮を抑えられないでいた。

「ふん、わしを誰だと思っている」

「ああ、そうだったな」

笑いながら老人の方に向き。

「ありがとうございます」

頭を深く下げた。

「別に構わんよ。というか本当にこれでいいのか？ 普通ならこれだけのモノでじゃなくてもいいじゃろう」

「いや、これでいいんだよ。材質は黒の方が吸収力が強いし、高度もあるこれぐらいないとちからいっぱい振り回す勇気が持てないんだよ。俺の設計するものは二本だからなそれに特別な呪文をいくつもかけたし、俺たちの仕事を考えたら黒の方がいいしな」

翔はいつの間に碎けた言い方に変わっていた。老人は注意せずにむしろ孫を見る目で翔の言葉を聞く。

「そうか、それとこれは簡単に手に入ったぞ」

そう言う老人は今度は小さい方を開けた。そこに入っていたのは青銅色の大型の拳銃が収まっていた。フォルムは拳銃にしては長く厚みがあり、普通のハンドガンでもなくライフル系に対戦車系の銃にも見えない。対魔術用拳銃ケルベロス。一度に三発までの弾丸を放つことができる優れたもので射程も長く、貫通力もあり、さらに五十六？砲という大型の銃口が特徴。

「これがケルベロス、迫力あるな」

翔はマジマジと眺めながら言う。

「ふん、対魔術用などどうして欲しがる？ これは三百年前の負の遺産だぞ」

三百年前、世界は魔術側と人間側に別れていた。現在はそんなことはないが、昔は強者と弱者に別れていた。そういうふうに考えるなら今も別れているが、根本的に現在では世界中の人々が魔法を使える。だが、三百年前は違う、だから戦争が起こり、このケルベロスは多くの魔術側の人間を殺した兵器。

「俺のプランに合うのがこれしかなかったんだよ」

翔は半ば愚痴のように言う。どうやら翔も負の遺産には本当は手を出したくなかったのかもしれない。

「ふん、それは災難じゃったな」

老人も少し哀れみを含んで言ったが、視線は好奇の色が見て分かる。

「つか、これレプリカなのか？」

「いや、本物じゃよ。試しに持ってみん」

老人はケースから一丁取り、翔に渡す。

「うへー重いなあ。これは改良の価値ありだな」

「そうか」

翔は珍しく子供のようになり、目をキラキラさせながらケルベロス色々な形で持ち、満足したらケースしまった。

「爺さんサンキュウな」

「ふん、金さえくればこっちは別に構わん」

「そう言ってくれると助かる」

翔はそう言うとかバンから五百万入った紙袋を老人に渡す。老人は少し悲しそうな顔でそれを受け取った。

「んじゃあ、行くな」

翔は立ち上がり、腰のホルスターから黒い銃抜き、ケースに向けて発砲する。そしたらケースは光の粒子に飲まれて老人と翔の前から消えた。

「手際がいいの？ 本当にこれで最低ランクとか言われてるのは、世も捨てたものじゃな」

「はははあ」

寂しそくに笑いながら元来た道を戻る。

「んじゃなあー」

「おう、たまには弟子の顔も見たいと言っておいてくれ」

「わかった」

翔は光に飲まれて、気づけばさっきまでいたオフィス街に立っていた。

「さて、帰るかね」

翔は時計を見て、自宅を目指す。

その頃、学院では。

「あのバカは待つてないでささと帰りやがって」と悪態をついていたのは燐だった。

「仕方がないだろう。別に待つとけとは言つてないんだらう?」

「そうだけど普通は待つとくものじゃない?」

努の言葉に過剰までの反応する燐。

「そうだけど、普通はささと帰ると思うけどね……………」

優しく諭すように言うが。

「何か言つた?」

とドスの聞いた声で呟かれて黙るしかなかった。

「努でも黙る時があるのか」

燐の頭を優しく撫でながら現れたのはこの学院の二年生で生徒会副会長をしている藤堂真司とうどう しんじだった。

眼鏡をかけて、髪をオールバックにまとめて切れ長の眼は知的さをだしていた。背も翔よりは大きいが努よりは小さい。この学院の制服とこの人の出すオーラは自然と合つてると努は内心で考えていた。男子の制服は女子と違って黒主体でカッターシャツまで黒い。

「シンさん」

努の顔は助かつたと表情にでていたを見て軽く苦笑いしていた。

「もう、シンさんやめてください」

燐は顔を真っ赤にしながら真司の腕から逃げる。

「いや、悪かつたな」

努は後ろでこちらを見ている女子学生が燐を強く睨んでいたり困惑していたりと様々な表情でこちらを見ていた。

（この人は俺たちのまえだとこんなだけと普段は厳格な副会長で通つてゐるからね。あの反応は仕方ないよね）

と心の中で呟いていた。

「あれ、そういえば翔はどうした？」

真司は周りを見ながら言う。

「……………」

燐は下を向きながら黙り込んだ。

「……………アイツは先に帰りました」

努は内心冷や冷やしながら答えた。

「……………そ、そうか。先に帰ったのかアイツは」

真司も燐を横で見ながら答える。

「まあーアイツも友達ができて、一緒に帰ったんじゃないか？」

真司の言葉に努は「いや、それはない」と首を横に振るう。真司は少し難しい顔で「何でそういうことを言うんだ、お前は」と二人で口論していた。

「生徒会を束ねる者の一人が、どうして一年生相手に口論してるのかな？ 副会長」

突然、声をかけられて二人とも黙り込み、二人ともいや正確には真司だけが後ろに振り返る

そこに立っていたのは身長百五十五cmの小柄な女生徒だった。

ぷくつと膨れた口に腰に手を当てていて『私、かなり怒ってます』

と言っている風な状態で立っている。二人とも身長が高い方などで一旦下に向かねばならのが、そこにはこの身長では有り得ないぐらの破壊力を込めた二つの山が二人を襲う。燐もこの年の女子に比べたら大きいほうだが彼女の場合は身長とのギャップが強い。

「……………今、二人ともどこを見て、失礼なことも考えませんでしたか？」

二人とも慌てて首を左右に振る。

「……………そう、ならいいですけど」

まだ、納得がいつてないという顔をするが今はそれどころではないと自分で判断した。

「シン副会長。今、あなたが何をしていたかを説明してください。」

この二人は我学院の有力生徒ですよ」

「麻利亜会長。悪ふざけも止めましょう。わかってるんでしょう？」
麻利亜の怒り顔に対して真司は呆れた顔で言う。

「……………」

暫し二人の睨み合いが続く。しかも周りの生徒は一目散に逃げる。それはそのはずだろこの学院のNo.1の秋瀬麻利亜とNo.2の真司が睨み合っているのだから。

（というかにらみあつてると言うのかこの場合は、一方がかなりの呆れた顔でいるけど。しかも燐はこの状況は無視ですか。オマエの中はどこまで行っても翔が基準なのか）

努は睨み合ってる？二人を放置してそんなことを考えていた。

「おいおい、どうしたんだこの状況」

更の面倒な人が現れたことに努は頭が痛くなってきた。

現れたのはキャンポランを絵に書いたような人物だった。身長は翔と一緒にだが、体格はここにいる男子の誰よりも線が細い。しかもこの男子はキツネ顔で微笑を浮かべてるだけで警戒したくなるほどである。

「速水雅樹風紀員長。あの二人を止めなくてはいいいのですか？ いちよう言っておきますが二人ともマナの流れが活性化してますよ」「いいんだよ努。どうせ会長はここに翔がないのが不満で真司に当たってるだけだから」

雅樹の視線は生暖かいが今は風紀員としてこれを取り締まるべきだと努は思う。

「和んでないで、止めに入ってください」

「嫌だよ、俺は死にたくないよ。戦闘は苦手なんだ」
（うそつけ。ただ面倒なだけだろう）

努は半ば本気でここから避難をしようかなと考え始める。

「あれ、二人とも何でにらみあってるの？」
ここでようやく燐が復活した。

「……………」

「クフフフ」

努は呆れて固まっていたが隣の雅樹は笑いを抑えるだけで手一杯の状態だ。

神よ。この状況を何とかしてください。お願いします。俺をこの状況から逃がしてください。

努のこの願いは神に届いたかはまた別の話である。

マンションの管理コンピューターの前で翔は止まっていた。自分の部屋の番号を打ったらドアが開くシステムなのだが、自分の部屋から女の子の声が聞こえて「今、開けるね」と言ってきたからである。

（どういうことだ、何で俺の部屋に女がいるんだ？）

翔は警戒心MAXで自分の部屋に向かう。エレベータを上り、二十七階で止まり、自分の部屋まで進む。部屋の前で止まり、腰のホルスターから銃を抜き、構えながら自分の部屋の扉を開ける。玄関には見慣れない靴が四足あった。

「二つは男のモノにもう二つは女のモノ。隣たちなら数が足りないな。んじゃあアイツらじゃないとすれば誰だ」

小言で呟き、音と気配を消してリビングに向かう。

声が聞こえる。楽しそうに笑う声。

（女の子の声が二つ？　なら男の方はどこかに潜んでいるのか）

翔は気配を完璧に殺してリビングのドアに近づき、派手な音共に開ける。

ガシャアアアン！

「……………」

テーブルに座りながら仲良く喋る二人がこちらを見て固まっていた。

「……………」

一方、翔も二人の姿を見て、緊張を解く前にここにいるはずもない珍客の姿に唖然としていた。リビングの派手な音にキッチンとトイレから男達がりビングに向かい、翔の姿と二人の女の子を交互に見て軽く笑っていた。

「どうして、姉さんたちがしかも兄さんたちまで」

翔の思考ではこの状態が分からないでいた。

「もう！ 翔びつくりするじゃない」

女の子の一人が翔にむかって怒鳴る。少し茶色が混ざっている髪を肩のところまでの長さで整えており、元気な瞳が今は怒りに燃えていた。

「うん、歌穂^{かほ}ちゃんの言うとおりだよ。扉をそんなに乱暴に開けてはいけません」

もう一人の女の子はおっとりしていて、金髪の髪を腰の位置まで伸ばしていて電気の光でキラキラと輝いていた。

「ハハハハ、翔のヤツ^{めくみ}恵ねえの声が分からなくて敵だと思ったんだろっ」

翔の後ろからは野性的な声を発したのはワイルドな相貌と筋肉が服の上からも分かるぐらい盛り上がった少年。

「和馬^{かずま}の言うとおりかもしれないね。翔勝手に上がって悪かったね。頼むからその銃をしまってくださいか」

翔に声をかけたのはキッチンから出てきた男子だった。和馬はこの中では一番背が大きいがこの男子は翔より大きく体型も翔より細い。だが、眼鏡をかけた瞳から発する輝きはこの中では一番輝いている。

「わかった、琢磨^{たくま}兄さん。姉さんたちもすまなかった」

翔は素直に謝り、後ろからは和馬が背中を押して、リビングに入る。

「いいんだよ、俺はむしろ嬉しいぜ。翔は油断はしてないのが分かっつてよ」

和馬は嬉しそうだが他の三人は複雑そうな顔で和馬の事を睨んだ。
「…あーどうしてここにきたんだ？」

翔は微妙な空気を変えるために話題を振る。

「それはお前に入学のおめでとうって言いにくさに決まってるでしょう」

歌穂はそんなことも分らないのつと顔に出てたが翔には残念ながら伝わっていなかった。それ見て残りのメンバーは少し悲しそうにしていたがそれも翔には分からなかった。

「……そ、そうだ、翔にあげるものがあるの。受け取ってくれる？」
恵がそう言いながら小さなケースをテーブルの上に乗せる。翔やみんなの視線は自然とそのケースに集まる。

「あ、それね？」

「完成したんだね」

「おお！ 恵ねえやるじゃん」

「……………」

翔以外は中身が分かるらしくてみんなして恵を褒める。翔は少々置いていかれてしまってる。

「…みんなはこれが何か分かるの？」

翔は恵以外に聞く。

「…もちろん」

三人とも自信を持って頷いた。

「……………」

翔は三度目の無言。

「…「どうした（の）（よ）？」」」

四人とも翔のだんまりに反応するが。

「そろそろ説明をお願いしたいんだが？」

語気を強みに言った。

「それもそうだな」

琢磨は恵に視線を送るとコクリと頷き、ケースを開ける。そこには十本の黒い三十cmぐらいの棒が入っていた。

「これは？」

そのうちの一本を取り、恵に聞く。

「え……え、えーとね……わたしがつく……作ったの」

顔を真っ赤にしながら恵は翔の質問に答える。

「スゴイでしょう！！ 先生はプロ顔負けだつて言つてたわよ」

歌穂は自分が褒められた様な言い方をする。

「ああ、確かに凄いできだな。これはマナに反応して属性を操作できるのか、しかも二重構造で二種類のマナを同時に蓄積ができるようにしてるのか。確かにこれは高校生レベルじゃないな」

翔は興味津々で棒を眺めて真ん中の部分でポキッと分裂させる。

マナを流せばマナの刃ができる、流す量をこっちで調整すれば長さ
と強度も調整できるようだ。

「恵姉さんは錬金術はここまで進歩していたなんてね。正直、驚きだよ」

恵は翔の言葉に感激して涙を流す、それを隣から優しく歌穂が抱き、琢磨が頭を撫でる。

「おいおい、そこまで感激するものじゃあないだろうが、先生にも認めて貰ったんだろう？ なら俺の言葉にそこまで感激するものか」

「お前に認めてもらうことが一番だからな」

訳も分からない翔に助け舟を出したのは和馬だった。

どういうことだ、俺に認められて嬉しいはずがないだろう。だつ

て俺は落ちこぼれだぞ。アンタたちと違って落ちこぼれなんだぞ。

森志羽もりしばの名を汚す害虫なんだぞ。

「お前は俺たちにとって自慢できる弟だ。それを忘れるんじゃない」

和馬は翔に言い聞かせるように言う。

「そつだよ。キミは僕たちにとって自慢だよ。もちろんここにはいない雫しずくもそう思ってるよ」

翔は苦い顔で琢磨の話聞く。

アイツはそんな奴じゃない。俺のことを母さんたちと一緒に害虫を見る目で俺に接してきた。アイツは森志羽の次期当主だ。立場が

違う。しかも俺は、森志羽の家を勘当された身だ。本来ならここに兄たちがいるのでさえ問題だ。

「あ、それとねそれはあなたが作ったワイバーンにヒットするよう
にできてるから」

やっと落ち着いた恵が翔に言う。少し照れた口調だ。

「ヒット？ どういうこと」

「ゴメン意味が分からなかったよね。後ろの方についてる白い部
分が横にスライドしてワイバーンの銃口にあててみて」

言われたとおりに白い部分を掴むと自動的に動き、ワイバーンを
ホルスターから取り出して、銃口に白い部分の方を近づける。ガチ
ンと派手な音がでて、ワイバーンにフィットする。恵はその姿を見
て胸を撫でおろす。琢磨は一本ずつ翔に渡していく、無言で受け取
り取り付けていく。

「……………」

四つ取り付けたら翔は止まった。ワイバーンはもう拳銃ではなく、
大型のスナイパーライフルと同じ長さの九十cmの長さに到達して
いた。しかも、重量が全く感じさせない。普段のワイバーンと一緒
だ。これなら片手打ちもできると翔は思う。

「凄いな。これをもう発表するのは何時だ？」

翔は当たり前なことを聞く。これだけの性能を作り出せるなら世
界に発表するべきだと翔は考える。

「…………それは発表しない。だって翔のために作ったんだもん」

恵は笑顔でそう言った。

「……………」

数秒考え込み。

「ありがとう」

翔はそう言った。その言葉を待ってたのかみんな翔に集まり、頭
を撫でる。

「な、なんだよ」

翔は必死に逃げようとするがこの四人からは逃げられないようだ。

「さて、翔も帰ってきたし恵のプレゼントも気に入って貰ったみたいだから夕食にしよう」

琢磨はみんなにそう言う。

「おう、兄貴に料理は上手いからな」

「そうだね。お兄ちゃんの早く、早く」

「こら、歌穂ちゃんは少し落ち着きなさい」

この夜、久しぶりに兄妹（姉弟）水入らずのお祝いが始まった。

（みんな、ありがとう。俺なんかの為にありがとう）

翔はそう心の中で呟いた。

（俺にはもったいないよ。こんなにしてくれるのに俺は、あの能力を使えば忘れてしまう。だが、これだけは忘れない。こんなにしてくれる仲間を絶対に忘れたくない。忘れるものか）

翔はここにいない隣達の顔を浮かべて今、楽しそうにはしゃいでる兄達を見て、悲しそうな顔でそう決心した。

2 仲間（後書き）

まだ、一話が続きますので頑張って書きます。あまり、期待しないで待って下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9556z/>

右手は過去に干渉する聖剣を左手に未来を紡ぐ魔銃を

2012年1月5日19時47分発行